



「高校書道」の臨書指導法： 自己教育力の育成をめざして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 平田, 善次郎, 矢野, 敏文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004251

「高校書道」の臨書指導法

——自己教育力の育成をめざして——

二十一世紀を目前にした現在、わが国の学校教育現場では、さまざまな問題点が指摘されている。それらの問題点をもたらす最も大きな要因は、受験体制のもとでの知的偏重によるゆがみ現象である。特に、中学校、高等学校においては、多くの学校で受験に必要な知識を少しでも多く、かつ速く習得するための効率的な学習が進められ、学習全般が点数化されたり、習得の速さや正確さのみが評価される傾向が強い。そのため、一方では、学ぶことが本来もっている、思考や創造の喜び、変容し向上することからの自信、充実感、成就感等を味わうことの出来ない生徒が多く生まれてきている。今日のように科学が発達し、高度な情報が日常生活まで浸透してきている社会では、よりよく生きて行くための知識が必要なのは言うまでもない。しかし、青年期は人格形成に最も重要な時期とされ「児童期的な道德感・価値観の殻を脱皮して、新しい自己と人格

平田善次郎
矢野敏
矢野敏
矢野敏

を主体的・意識的・自覚的に築きあげるところに意味がある。」といわれる。また、「個別化と社会化の時期であり、人格を主体的・能動的に形成する時期である。」⁽²⁾といわれている。このように、中学生、高校生の、子どもからおとなへの過渡期である青年期は、知識ばかりでなく人格形成も含めて総合的で広範囲な主体的な生きる力をも身につけるため逃すことのできない重要な時期といえる。したがって知的活動のみならず、身体を使った運動能力の向上や健康の維持、自然や芸術作品に触れた時の感動や共感・他者との議論や思考の交流による視野の拡大等、主体的に社会参加が出来る能力の習得が強く求められている。

山道友信は、芸術の現代における使命として「①芸術の教育的機能、②芸術を介しての人類の相互理解、③社会的な人間性回復の機能」⁽³⁾の三つを挙げ、文化現象として公的な存在資格を有することを見逃してはならないと、芸術の社会的機能について説いている。国際化の時代といわれ、世界中のものや文化が交流する現代であるだけに、また、教育の主体化が強く求められる時期であるだけに一

層、中国、日本の伝統文化に根ざして具現化された書道芸術を、現代の教育の動向に即して、その実践方法を考察することに大きな意味があると考ええる。

ここでは特に、書道を学ぶ上で最も一般的方法とされている臨書について、高等学校芸術科書道ではどのような視点で捉えるのが最も教育的意味、効果があるのか考察を進めてみたい。

二、近、現代の名家の臨書観

書は、文字を素材にして作者の感興や心象を白い紙に、黒一色の墨によって表現された極めて単純化、簡素化された造形芸術である。大小、太細、長短、曲直、向背、遅速、濃淡、潤渴、渋滑、強弱、柔硬、疎密、深淺、明暗、黒白等の相矛盾する諸要素が、筆順に従って運ばれた一回限りの筆の軌跡の中で、刻々瞬時に変化統一された時に初めて優れた書作品が生まれるのである。更に、用具用材、用筆、運筆、墨色、構成、余白、気脈の貫通等が気力の支えによって渾然一体となって表現されるのが書の特質である。それだけに、深遠で複雑な内容をもった書の表現には、書美への深い体験に基づく感性、技術の練磨、見識の向上等が欠かせないのである。書道の学習は、一般的に創作、臨書、鑑賞、理論のように分けて考えることが出来るが、基礎・基本を習得し書の深奥に向かうためには、臨書の研究が必要になってくるのである。

臨書とは、飯島春敬編の書道辞典によると、「書の古典を学ぶこと。技法的に、形式的にすぎれた内容をもっている筆跡(古典)を学ぶことによって、①鑑賞の深化の面、②技法習得の面、③書作の

原理、方法を習得する面で、創作活動への自己の成長をはかる。」⁽⁴⁾ こととしてしている。最も一般的な捉えである。臨書をしなければ創作が必ずしも出来ないというわけではないが、広く古典を臨書することによって書美の原理の発見や理解、表現力が幅広く習得でき、普遍性、客観性のある書作が可能になってくる。そして、何よりも歴史に淘汰されてきた古典といわれる名跡には、それぞれの時代の能筆家の豊かな人間性と個性、美的原理に合致した技術、緊迫感を伴った感動がこめられていて、それを臨書によって追体験できることに大きな意味がある。

臨書研究に精通し、卓越した見識をもつ近、現代の名家は、体験を通してどのような臨書観を持っているのだろうか。名家の臨書観を概観することにより、臨書の性格が一層浮き彫りになってくると思われる。川谷尚亭(一八八六―一九三三)は、「古碑帖の臨書は貧弱な自己の見聞を広めるための古への視察である。それはあたかも、禪僧が名山の名僧に参じ開眼するようなもので、自己の卑俗を薰する手段である。――中略――ただ古典をみるのではなく、筆路をたどって観るのであって、形、筆意を心中に解して筆を執るのである。書の妙味は気脈の貫通にある。」⁽⁵⁾ といい、初学にもっとも必要なものは筆力の養成であると指摘している。次に、直接古碑帖による臨書研究を提唱し、科学的方法論により大きな成果をあげた比田井天来(一八七二―一九三九)は「書は性情を表現する芸術である。性とは心の動体を謂う。千変万化する清浄無垢なる心の動きを表現するのである。臨書は古碑帖により、この書の性情の表現の仕方を養うのである。あたかも画家が天然美の写生により力を養うのと同じである。」⁽⁶⁾ といっている。天来が「性情の表現の仕方」と言い表している部分の内容を、比田井和子は、「筆意」と要約解

述している。上田桑鳩（一八九九〜一九六八）は、臨書の意義として一、「古典から感じた美を表現する。（感じた内容を具体化する）
 二、古典の蔵する書的原理を体得する。三、技術の訓練。（感じた内容に則した完全表現の能力を養う）」の三点をあげ、更に「自分の抱いた美を表現するに適した形、筆勢の研究工夫が大切で、臨書はそのための研究中の一課題なのである。」⁽⁸⁾と述べている。次に、手島右卿（一九〇二〜一九八七）は「臨書は筆意の勉強にある。（創作につながる）・臨書のあり方として、眼に映ったものを、色付けしないで、絶対のものとして再現していく。・直截に感受（発見）したものをはっきりつかんで発展的につき出していく。・形質、性情の相違を的確につかみ出し、表現にのせる。」⁽⁹⁾と述べている。金子鷗亭（一九〇八〜）は、「古典の臨書により、書の面目を知り、その上で一家の樹立に資する。臨書に当たっては、文字（古典）が何かをいおう（訴えよう）としている。それを感じとることである。初心の際は、自己を空しくして、自己の個性をできるだけおさえ、次第に経験を重ねて線質を写すようにする。」⁽¹⁰⁾と述べている。桑原翠邦（一九〇六〜）は、「形がどういふ連筆から生まれたか、という見方が最も大切である。碑帖をみたとき、全体をすうっと見て取りのみ込んで、そして書くのが本当の臨書のあり方である。本当の臨書は観察プラス解釈である。同じ原本でもみる人が違い、見方が違うのであるから臨書作品は単なる模倣でなく、創作と同価値のものである。」⁽¹¹⁾と述べている。森田子龍（一九二二〜）は、「臨書は古典を鏡にして自分を見出し、更に自分を豊かに育てることである。その書を見た感動に生き生きと躍動している自分が書くこと。（手本をみて、形や筆づかいをまねて習うことではない。）形をみながらその形に縛られない自分になることであり、自分がまる

ごと感動にひたることである。」⁽¹²⁾と述べている。以上、近、現代の名家の臨書に対する最も根本的な考え方を概観した。いずれも厳しい書作体験を通しての臨書への見解であるだけに、ごく一部分の抜粋であるにもかかわらず含蓄があり簡潔的を得ている。これを更に、それぞれ最も強調された特徴的な部分を対比してみると、次のようになる。

- ・川谷尚亭 「気脈の貫通」
- ・比田井天来 「性情（筆意）の表現」
- ・上田桑鳩 「筆勢の研究」
- ・手島右卿 「形質、性情の把握」
- ・金子鷗亭 「線質を汲み取る」
- ・桑原翠邦 「運筆を通して形を観る」
- ・森田子龍 「感動の表現」

ここに取り上げた名家は、独自性に富み、それぞれ個性豊かな作風を確立している。誰一人として類似した作品を発表していない。しかし、臨書に対する考え方の根本には、言葉の表現上の違いを越えた共通性が認められる。すなわち、古典の持っている「気脈」、「性情（筆意）」、「筆勢」、「形質」、「線質」、「運筆」、「感動」を汲み取って表現することが臨書だということである。古典を結果としての「形体」に焦点を当ててではなく、感動を書作品に表現する過程である「動き」に焦点を当てているのである。古典を単なる名跡としてではなく、感動した主体が創造的に表現した生きた姿として捉えようとするところに共通性がある。重複した表現を更に要約し、『形質、筆意、筆力、筆勢』とすることができると述べている。これを古典がひとしくそなえている学べき要素（A）と仮定しておく。

三、書道教育論にみる臨書観の推移

二、において名家の臨書観を概観したが、いずれも臨書の本質に迫り、その意義を認めている。臨書は、現在でも最も一般的で、かつ重要な書道学習の方法である。しかし、名家の臨書観や方法がそのまま高等学校の教育の場に敷衍して考えられるわけではない。なぜなら、生徒の書道に対する興味関心に差があったり、発達段階（書道に関する感受性、理解力）や表現力、技法的な習熟度に差がみられるからである。これらの差異を考慮に入れながら、意図や目的に応じて主体的に取りくむことができる学習を進めなければならぬ。そして、生涯をかけ練磨する書作家とは異なり、学校の授業では限られた時間が設定され、目標に対して評価が出来るように学習内容を組み立て、個人や集団に学習したことが定着するように配慮されなければならない。したがって、教育の場における臨書は、生徒の実態や意図や目的によって条件設定されたものにならざるを得ないのである。

また、書道教育論にみる臨書観はその時代の教育思潮によって推移がみられる。昭和三十五年初版の平山観月の「書道教育汎論」では、臨書の性格として「臨書法は手本を傍に置き、これを見ながら書くことで、書の勉強に最も多く用いられる方法である。一般には書道教育といえば臨書すること、それも手本の形どりに書くことのように思われ、臨書によらない書は我流と呼び、とかく軽視する意味があった。これは古典美を最上のものと見、名声あるものに權威を感じる結果によるものと思われる。また生活に役立つ技術を習得するためには、既成の方法を取り入れることが早道と考えられたためであろう。けれども臨書の性格や目的は、単に手本の真似を

することにあっては、実は次のことを学ぶためである。(1) あらゆる表現技法を学び、書とはどんな性格のものかを理解体得する。(2) 先人がどのような態度をもって書いたかを理解し、鑑賞を深める。(3) 書の創作技術を理解し且つ体得する。(4) 古法帖を手本にして、自分なりの臨書作品を作る。」と述べている。そして更に、臨書の表現過程の項では「要するに臨書は、手本から受けた感じを本として表出する書の営みである。」⁰⁴としている。臨書の性格として四つをあげているが結論としては、古典（手本）のもっている美的要素、原理を習得することを基本にした臨書観といえる。

上条信山は昭和四十五年新訂出版の「現代の書教育」の中で、臨書の意義として「臨書は、従来書を学ぶ者にとって欠くことのできない過程であると考えられて来た。現在でも同様に考えられている。臨書とは既につくられている名筆や法帖を手本として、その形態や性情を汲み取っていくことをいうのである。由来、書の学習においては『法に入って法を出る』⁰⁵といって、まず古典に没入することを第一義として来たが、書道史上、一大転換期にある現在、臨書の持つ意義も従来のそれとはかなり異なって来ていることは当然考えられる。」⁰⁵といい、更に「(1)書美の体験、(2)型の伝承、(3)表現技術の習得、(4)創作への道」⁰⁶の四つをあげている。これまでの臨書の在り方を批判、再建するという立場で「臨書主義批判、臨書力即創作力となるか、鍛練主義批判」を展開している。そして、「技術的には幼稚であっても自己を生かし、心の動きを大切にしていくこと、自分で工夫し自己を打ち出していくという方向に向かわなければならぬ。」⁰⁷と述べ、芸術意識に立つて自己の内なる感興を大切に表現して行くことを主張している。臨書をより自己の方に引き寄せ、表現力を身につけるための手段と考えることを提起している。

久米公は、平成元年初版の「書写書道教育要説」の中で「臨書の学習指導を主体的活動によって仕組む根源となるものを、私は、対象に対する主体の感性的把握（感動）だと考える。しかも、その主体の感動を、教育の場では、そのまま各主体の中にとじ込めておかないで、なんらかのかたちで引き出して価値づけること、即ち、あまいなものや表層的なものは補強し、自らの感動として自覚させることだと思ふ。つまり、表現学習に先立って、着実な『主体の鑑賞とその指導』を行うことだというわけである。」と述べている。主体的活動によって創り出された個性的結晶が古典であるとして、臨書の学習が感動を契機とした主体的活動の中に仕組まれるのは当然であると述べている。自らの感動から出発してこそ、初めて主体的、自覚的に学習に向かうことが出来ると指摘し、臨書においても初期段階の古典との出会い、鑑賞をこれまで以上に重視している。

書道教育の立場から、臨書について述べられた三氏の見解を要約すると次のようになる。

・平山観月 「古典の美的要素、原理等の習得が基本」

「古典に比重がある。」

・上条信山 「創作のための表現力を身につける。」

「創作の方に比重がある。」

・久米 公 「感動から出発して主体的学習に向かう」

「学ぶ側の主体に比重がある。」

このように三氏の見解を要約したが、戦後昭和期の書道教育における臨書学習の在り方が順次推移してきたわけではない。書美の原理や技法の習得を中心に据えた臨書学習が授業の多くを占めていたために、臨書主義、鍛練主義、模倣主義などと、一方から批判された

のも事実である。また、戦後の芸術思潮の自由闊達な展開に伴って一般の書の展覧会でも、表現が多様化し創造性、創作性が尊重されるようになってきた。書道教育の現場でも、臨書よりも創作を重視し、心の躍動が純粹に表出されればよいとする実践がされてきている。更に違った立場で、加納政雄（守拙）は、昭和二十九年の「書教育における学習指導の実際」の中で、「要はその手本の本質にふれて考えさせ工夫させて、これだと思ふ方法を探ればよいのである筆の角度などは表現のための一つの材料に過ぎない。『こうしたらこの線が出た』この工夫この発見が大切なのである。そしてそれが鍛練されて本当の自分のものになる。このように右し左して試み工夫するところに自己を見出し、真の興味が湧き、また発見の歓喜があるのである。」と述べている。生徒が自己の力で、「つかみとること」、「個」を尊重する姿勢を打ち出している。

このように、指導者の芸術観、教育観の違いによって、臨書の学習内容や方法に大きな違いがあった。しかも、書道教育自体が、人間性に根ざした体験的実技的教科としての特性をもっているために主観が入りすぎると普遍性を欠くことになるのである。したがって書道教育の最も重要な観点は、「広い視野に立った教育の今日的課題は何なのか」、「課題達成のために教科として、どのような指導方針によらなければならないのか」、「学校や生徒の実態に即してどのように実践するのが最適か」の三点にあると考えられる。臨書指導の在り方はおのずからそれに依らなければならない。二十一世紀を見据えた教育における今日的な課題は、個性の尊重、生涯学習につながる自己教育力の育成、国際化への対応等がいわれている。すなわち、これらの課題を達成するために、書道教育では教科の特性を活かしながら、生徒の「主体性、個性」を育んでいかなければ

ならない。ここでは、『主体性、個性の尊重』を今日の書道教育では欠くことのできない視点と考え、これを(B)と仮定しておく。

四、これからの臨書指導の方向性

(一) 人間形成に向かう臨書指導

二、において、古典から学ぶべき基本的な要素として『形質、筆意、筆力、筆勢』をあげ、それを(A)と仮定した。そして、三、においては、今日の書道教育で欠くことのできない視点として『主体性、個性の尊重』をあげ、(B)と仮定した。教育本来の目的である人間形成への営みに向かう臨書指導においては、(A)と(B)が調和し融合したものでなければならぬ。(A)も(B)も臨書指導の上で重要な要素であるが、どちらか一方に片寄ったものであってはならない。これまでは、指導者の観点や主義主張によって一方に片寄ってしまうくらいがあったのではないか。片寄り、実際の授業展開を幅の狭い方に向かわせ、硬直したものにしてしまふ。

仮に図式化すると次のようになる。

- | |
|---|
| <p>I、$A \times B \parallel A A$ (古典主義、主体性、個性が育ちにくい。)</p> <p>II、$A \times B \parallel B B$ (創作主義、客観性、普遍性にかける。)</p> <p>III、$A \times B \parallel A B$ (個の確立、真の表現力育成、普遍的創造力の育成)</p> |
|---|

Iの $A \times B \parallel A A$ のように古典のもっている要素、原理の学習に片寄ってしまうと、どうしても「教え込み」や「注入」の指導になっ

てしまう。古典の特徴を解説し、運筆や用筆の方法を教える方式の授業になる傾向が強く、生徒の学ぼうとする主体性や幅広い個性が尊重されない。逆にIIの $A \times B \parallel B B$ のように、主体性や個性を尊重するあまり、臨書が没個性的なもの、型にはめ込む画一的なものとして創作に片寄ってしまう場合は、客観性、普遍性に欠けたものになりがちである。創作を中心に授業を実施しているにもかかわらず、新しいものへの変革に行きづまり、皮相的な主体性、独善性に終始してしまう。中国や日本の伝統文化遺産である書の深奥に触れないまま書道の学習を終えてしまうことになる。そこで、これからの臨書指導の方向性としては、IIIの $A \times B \parallel A B$ のように、学ぶべき要素と学ぶ主体をともに尊重し、調和がはかれるような在り方が最も望ましいのではないか。AとBを調和させ、両者を貫く中心に「感動」や「学ぶ喜び」がなければならぬ。それは、生徒に対してのみではなく、指導者の側にも従来の指導法に反省を加え、新しい方法を導入して行く学ぶ姿勢がなければならぬ。「教学半」(書経)、「教学一如」(平田)でなければならぬ。かくして、「温故知新」、「主客合一」による真、善、美の調和的發展が図られ、伝統文化の継承発展につながるのである。

(二) 鑑賞を重視して主体的臨書に向かう試み(書道I)

- ① 古典教材 鄭文公下碑
- ② 目標 古典をじっくり鑑賞し、自分のことばで感想を書くことが出来る。

- ③ 展開 第一時、古典の鑑賞。特徴、雰囲気を感じとって感想を書く。工夫して揮毫する。

第二時、前時の作品と感想の発表。共通点の確認。作

者や用筆について補足解説。揮毫する。
 第三時、自己の課題をもって書く。自分の作品と古典を対比して鑑賞する。感想を書く。

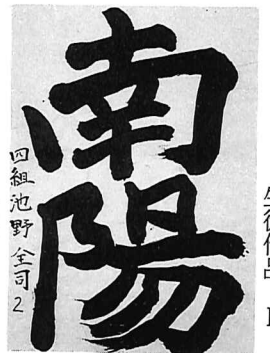
第一時 初期鑑賞	第三時 作品と古典対比鑑賞
<p>A 丸みを感じる。ゴツゴツした感じで正直に言うとなじめない。</p> <p>B 石に刻まれた文字なのに墨で書いたようにできている。参考のものよりも実際のもの(図版)の方が凄し、書いた人の凄みを感じる。</p> <p>C ゆったりとした感じ。腕をたくさん動かして書いているようだ。線がきれいじゃなくてギョギョと力強い。古びた感じがする。</p>	<p>A 私はきれいで整った方がよいけど、新しい面が知れてよかったと思う。</p> <p>B おおらかさは出せたが、もっと気合いを入れて迫力のあるものを書きたかった。こまかい筆使いがむずかしい。</p> <p>C なかなか理屈がわかっていても上手に書けない。もっとコンパクトにうちこんで途中でうねりのある線を出したい。改めて見ると動いているようだ。</p> <p>D ゆっくり書いた方が書き方がうまくいく。墨がたまってしまっているので、少し速く書いた。</p>

※A、Cは女子、B、Dは男子。第一時と第三時のA、Dは同一の生徒である。

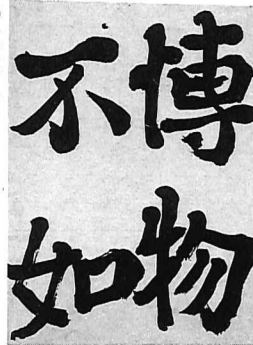
第三時 生徒作品 A



生徒作品 B



生徒作品 C



生徒作品 D



⑤実施上の留意点

ア、初期鑑賞でも、じっくり見る時間、書く時間をとる。
 イ、鑑賞文は要点を書かせ、文章を書くことが苦痛にならない量にする。

ウ、鑑賞文は作品に添付して提出させ、関連をもたせる。

エ、鑑賞文と作品を発表し、意欲化、客観化をはかる。

⑥実施後の分析

臨書するに当たり、古典をじっくり眺め、自分なりの言葉で感想を表現し、自分の受けとめたところから出発するように鑑賞を重視してみた。初期鑑賞では、どうしても形体上の特徴や感覚的な見方になってしまうが、中には(B)の生徒のように古典のみに感動を表明する者もいるし、(C)の生徒のように古典に没入

して、どのような運筆によって書かれたのか自分なりの予想にまで及ぶ者もいる。また、第三時の作品と古典の対比鑑賞では(A)のように、臨書体験を通してなじめない第一印象から、古典の新しさを知って成果を感じたり(D)の生徒のように用筆の工夫まで発展させている者もいる。総じて、初期鑑賞を大事にして、古典への印象、イメージをふくらませることから出発する臨書指導は、学習への関心が持続して、自己課題への工夫や試行錯誤がみられる。形体のみへのこだわりが薄れ、なぜ上手にいかないのか運筆の方に関心をよせる生徒も出てきた。

(三) 課題選択による主体的臨書学習の試み(書道Ⅱ)

① 題材 書体選択(楷、行、草、隸書)による臨書

② 目標 課題をもって古典を選択することができる。

・課題解決に向かって、工夫し追求することができる。

③ 指導計画

第一時・課題をもって古典を選択する。揮毫する。

第二時・課題と解決へのプロセスを発表する。書く。

第三時・到達点を確認し、次の課題に向かって書く。

④ 展開(指導事項の概要)

時間	教師の働きかけ	生徒の活動	学習形態
第一時	<ul style="list-style-type: none"> 書体選択学習の目的 課題設定、古典選択 	<ul style="list-style-type: none"> 学習の目的を知る 自己課題の設定 古典の選択 	全体
	<ul style="list-style-type: none"> 課題解決に向かって 次時にむけて 	<ul style="list-style-type: none"> 課題解決をめざし書く 	個人

第二時	第三時
<ul style="list-style-type: none"> 課題と古典を発表 解決に向かわせる(巡回指導) 	<ul style="list-style-type: none"> 到達点と次の課題について 交流による解決へ
<ul style="list-style-type: none"> 課題と古典の関連を発表し合う 解決へのプロセスを考える 参考資料を見る 課題解決に向け書く 	<ul style="list-style-type: none"> 到達点を確認し未解決の課題に向かう 班内での意見交換をする 書きひたる 感想を書きまとめる
個人	個人
個人	個人
班	班

⑤ 指導上の留意点

ア、自分の課題をもたせる。

イ、既習の古典を想起させ、課題解決との関連を持たせる。

ウ、参考資料(全拓、OHP、VTR等)の用意。

エ、解決のプロセスを交流させる。

⑥ 生徒作品と課題の例、及び教師の評価

生徒作品 A



ア、古典「興福寺断碑」

イ、課題「流れがうまく出せない

ので行書をやってみたい。

強弱をつけて、な

めらかさを出してみた

い。あまり形にこだわ

らないようにする。」

ウ、評価「比較的端正な楷書を好む傾向にあるが、不得意の行書に挑戦するのがよい。他の人に書いてもらったり研究心は旺盛で好感がもてる。」
生徒作品 B



ア、古典「張猛龍碑」
イ、課題「力強い楷書が好きなので、もう少し書いてみたい。大きくなりすぎないように、半紙に四字入るように書く。」

ウ、評価「自分の好きな楷書を更に追求してみようと課題を持つことはよい。力強い運筆を生かしながら、半紙四文字書きの目標が達成されている。」
生徒作品 C



ア、古典「木簡」
イ、課題「いつも動きが硬いといわれるので、草書的な木簡で気楽な雰囲気を出してみたい。」

ウ、評価「形体からの課題ではなく、動きや雰囲気にくく、動きや雰囲気に着点を当てたのは的確だ。思いきりよく重厚に表現できている。」

⑦実施後の分析

二年生の二学期に、既習古典のまとめとして選択学習の形で実

施した。既習の古典の中からの選択ということで、課題のたて方も自分の長所、欠点に照らして考えやすかったのではないかと課題を追求中の検証は、机間巡視による教師の指導、グループ内での発表や交流、感想文等によって行い、自分の殻に閉じこもらないようにした。課題解決のために、教科書や資料を改めて読み直すなどの自主的行動が見られたが、OHPやVTRの活用は十分分だった。これら機器の活用を生徒の手で行うことができれば課題選択学習の形にも深まりが持てるものと考ええる。

五、まとめ

古典といわれる、中国、日本の書の名跡は、それぞれが時代背景を持ち、その時代に生きた人間のドラマや美への憧憬が内包された文化遺産である。中国における甲骨文から金文、篆、隸、楷行、草書への書体変遷や、日本におけるかな文字の発生から平安朝かな美の隆盛等を見るにつけ、先人の偉大さを知るのである。その古典に触れて感動し、表現された美を追体験しようというのが臨書の学習である。本稿では、近、現代の名家の臨書観や書道教育論における臨書観等を概観することにより、臨書の学習の意義を再確認した。

問題は、臨書の学習そのものにあるのではなく、指導にあたり「教育的視点がおさえられているか、指導法が最適か、学習者の主体性や個性が尊重されているか」にあるのである。波多野誼余夫は、「自己学習の能力を育てるためには「やりがい、課題発見情報の活用、学習の計画、実行、評価検証」のプロセスを含むことを提示している。幸いにも芸術教科は、主体性と個性の尊重に視点を置いた指導

法の見直しに、最も着手しやすい教材といえる。本稿の書道Ⅰ、Ⅱにおける実践の試みは、それらの視点に立った指導法見直しの一つである。この試みの中からも、自ら学ぶことの喜びを見ることができ。今、求められているのは実践の試みと検証の蓄積による指導法の最適化にあるのではないか。

(教授旭川校・平田、非常勤講師・矢野)

(付記、本論文は、平田の理論研究をふまえて、矢野の実践記録を集約したものである。)

注

- (1) 久世敏雄他著「青年心理学入門」有斐閣新書七頁。
- (2) 同右。九頁。
- (3) 今道友信著「美について」講談社現代新書一五〇～一五五頁。
- (4) 飯島春敬編「書道辞典」東京堂出版八六一頁。
- (5) 「尚亭先生書話集」上野書店。
- (6) 田中成軒編「天来翁書話」誠之書院。
- (7) 比田井和子「比田井天来の書と書論」芸術新聞社刊「墨」
- (8) 上田桑鳩著「臨書新研究」教育図書研究会刊。
- (9) 「古碑帖臨書精選」日貿出版社。
- (10) 同右。
- (11) 同右。
- (12) 森田子龍著「書 生き方のかたち」日本出版協会刊。
- (13) 平山観月著「書道教育汎論」有朋堂一六一～一六二頁。
- (14) 同右。一六一頁。

- (15) 上条信山著「現代の書教育」木耳社二九四～二九六頁。
- (16) 同右。二九四～二九六頁。
- (17) 同右。三〇三頁。
- (18) 久米 公著「書写書道教育要説」菅原書房三〇七頁。
- (19) 加納政雄「書教育における学習指導の実際」、「書写・書道教育史資料」第一巻東京法令。六八一～六八五頁
- (20) 波多野誼余夫編「自己学習能力を育てる」東京大学出版会。二頁